

最後にひとつだけ
お願いしても
よろしいでしょうか4

鳳ナナ
Nana Oori

RB

レジーナ文庫

レオナルド

スカレットの兄で、
ヴァンディオン公爵家の長子。
ジュリアスの部下でもある。
破天荒な妹と上司のせいで
冒険が手放せない。

ジュリアス

パリスタン王国の第二王子。
優秀だがスカレットをからかうて
遊ぶのが大好きな腹黒い性格。

スカレット

冷たくも美しい容姿から
「氷の薔薇」と称される
ヴァンディオン公爵家の令嬢。
第二王子との婚約破棄をきっかけに
悪徳貴族達を拳で成敗した。

ナナカ

獣人族の元諜報員で
スカレットの従者
破天荒な
スカレットにいつも
振り回されている。

ヴァルガヌス

ヴァンキッシュ帝国の
後継者候補の一人。
何やら企んでいる
ようだ？

アルフレ임

竜の住まう国・
ヴァンキッシュ帝国の皇子。
スカレットのことを
「業火の花嫁」と呼び、
求婚している。

ヘカーテ

ヴァンキッシュ帝国の黒竜姫。
スカレットに思うところか
あるようだ？

登場人物紹介

目次

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか 4

7

書き下ろし番外編

月夜に響く貴方の調べ

361

最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか
4

第一章 我が愛しのかがり火よ。

——人間と竜が共に生きるなど、できるわけがなからう。
人間は脆弱で愚かで短命じゃ。強大で賢く、長命な竜とはまるで真逆の存在といつていい。

生物としての格が違う我らが、なぜ人を背に乗せなければならない？

たとえ千年先の未来で、他の竜共と同じように妾が知恵を失い、人化できない哀れな飛竜になり果てようとも。

妾は生涯、人間に心を許すことはない。決して、一度たりとも。

「黒竜の姫よ！ 今日こそ、その背に私を乗せてもらおうぞ！」

洞窟の外からやかましい男の声が鳴り響く。またあの人間じゃ。

突然妾のねぐらに一人でやってくるなり「背に乗せろ！」と言ってきた、仕立ての良い朱色の着物を纏い、燃えるような赤髪をしたやけに偉そうなふざけた男。

無視していればそのうち諦めるだろうと寝たフリをしていたら、強引に背に乗ってこようとしたから、尾で薙ぎ払ってやったのが半年ほど前だったか。

全長十メートルにも及ぶ、妾の尾による一撃じゃ。おそらくは全身の骨が粉々に砕け散ったであろう。

それだけ痛い目を見れば、さすがにもう二度とここに来ることはないだろうと思っていた。

だが一か月後、男は全身に包帯を巻いたミイラのような姿で再び私の元へ現れた。そして開口一番に一言。

「照れ隠しに殴るとは愛いヤツめ！ だがお前の気持ちも考えず、強引に背に乗ろうとした私も性急だった！ 故に今一度改めて告げよう！ 黒竜よ、私と番になり、生涯を共に——」

蹴り飛ばした。洞窟の外まで。

男はそれから毎日のようにやってきては「背に乗せろー！」と喚き立て、妾に殴られては包帯人間になって戻ってきた。

いい加減にしろと、先日ついに死なない程度に炎の吐息を吹きかけて黒焦げにしてやったというのに、また性懲りもなくやってくるとは……一体なんなのじゃあの人間は。

「寝ているのか？ まだ日も落ちていないというのに、まったくんだ眠り姫だなお前は」

地面の岩肌に寝そべった体勢のまま片目を開く。

片手に松明を持った男は、意外なことに肌にわずかな火傷痕が残っているだけでピンピンとしていた。

こやつ……炎への耐性でも持っていたのか。加減せずに焼き尽くしてやれば良かった。「なんだ、起きているではないか。寝ていたら今度こそ背に乗ってやろうと思っていたのに」

相も変わらずふざけたことをほざくこの男に、思い切り尾を叩きつけてやろうかとも思ったが。

どうせ何度殴られようが死なない限りこやつは何度でも戻ってくる。

面倒になった妾は再び目を閉じて、この男の前で初めて声を出した。

「帰れ。次に来たら殺す」

「!?」

男が驚いている気配が伝わってきたが、知ったことではない。妾は体を丸めて、男に妨げられた眠りに再びつこうとして――

「お前は最高だ！ 黒竜の姫よ！」

「!?」

男が叫びながら両手を広げて妾の頭に抱き着いてきた。この男、人間の分際で千年を生きる竜である妾の顔に触れるとは！

衣服や言葉遣いからおそらく貴族であろうこの男を殺せば人間の国と揉めると思い、今まで加減をしてやっていたが、もう我慢がならぬ！

妾は大きく口を開き、男を噛み殺そうとして――

「幼き頃から逢瀬を夢見ていた！ その翼は蒼穹の果てに広がる天を翔け！ その瞳は人智を遙かに超えた叡智を宿す！ 伝説の中だけに語られてきた人語を解す古代竜！ それが我が愛しの黒竜姫だったとは！ こんなに嬉しいことはないぞ！ 最高だ！ はははっ！」

心底嬉しそうにしているその男の様子に、妾は口を閉じるのをやめた。

幾度となく殺されかけ、今もいつ殺されてもおかしくない状況なのにもかかわらず、まったく警戒すらせずに、妾の閉じた口に頬ずりをするバカな男のその振る舞いに、なんだか殺すのがバカらしくなってしまうた。

「……離れる鬱陶しいヤツめ。ハエか貴様は」

「はっ!? 私としたことが!」

我に返ったのか男は慌てて妾の口から飛びのいた。胸に手を当て深く頭を下げた男は、申し訳なさそうに言った。

「淑女^{レディ}に対して大変失礼なことをしてしまった……! あまりの喜びについて我を忘れてしまつてな……ここに深く謝罪しよう。許せ、姫よ」

「姫、姫とやかましい。おかしな名前で妾を呼ぶでない。踏み潰すぞ」

「その気品を感じる声音と口調! やはりお前は姫であつたな! 顔立ちを見てそうではないかと思つていたが、私の見立てに間違ひはなかつた! これも愛がなせる技よな、黒竜^{くろりゅう}の姫よ!」

「言葉が通じぬのか、貴様……」

前足で立ち上がつて男を見下ろす。

妾が身を起こしたところを初めて見た男は、子供のように目を輝かせていた。何を期待しているのかは知らぬが、人間の愚かな好奇心に應えるつもりは毛頭ない。

「我が背に乗つて、なんとする」

「……?」

妾の問いかけに、男は眉根^{まゆね}を寄せて訝しげな顔をする。その瞬間、妾は翼を広げ大き

く口を開けて怒声をあげた。

恐怖に怯えたこの人間が、二度とここに訪れることがないように。

「どうせ貴様も他の人間と同じであろう! 竜を乗騎として扱い、戦いの道具とし、力を誇示^{こし}したいだけじゃ! 妾のような力のある竜を手なずけられれば、さぞ国では喜ばれるであろうからな! 違うか!」

妾の声に空気が震え、大音声^{どうおん}が洞窟^{どうくつ}を揺らす。

「長き時を経て知恵を失ひ退化した他の竜がどうあろうとも、妾だけは決して人間などには従わぬ! 人間は愚かで、脆弱^{ぜいじやく}で、すぐに死ぬ! そのような下等な生き物を背に乗せるなど、たとえこの身朽ち果てようともあり得ぬことじゃ!」

嵐のような妾の叫びが吹き抜けた後、男は呆然とした顔で立ち尽くしていた。ようやく身の程を知つたのであろう。

吹けば簡単に吹き飛んでしまう小さな人間と、強大な力を持つ竜である妾が相容れることなど、決してあり得ないということが――

「美しい……なんと美しいのだ、我が愛しの姫よ……」

「……は??」

男は泣いていた。泣きながら、笑っていた。

そして困惑する妾の前でひざまずき、高らかに歌うように言った。

「お前の美しい漆黒の鱗は、どんな闇の中にあっても鮮やかに輝き一目で私の心を虜にする黒き真珠のよう……」

男がゆっくりと立ち上がり両手を広げる。

自分の言葉に感極まったのか、両目からはとめどなく涙が溢れていた。

「お前の気高き心は、どんなに荒れ果てた荒野にあっても決して手折られることなく力強く咲き誇る一輪の花のよう……」

妾の目をまっすぐに見ながら、男は真剣な表情で続けた。

「黒竜の姫よ。私は帝国の皇帝でありながら、一目お前の姿を見た瞬間に心を奪われてしまった。そして言葉を重ねて、お前の心に触れた今……すべてをなげうってでも共にありたいと願っている。戦わなくとも良い。いや、むしろ戦うな。戦ってその美しい鱗に傷一つつけることなどあってはならぬ」

男は妾の足元に近づいてくると、ひざまずいて足のつま先に口づけをする。

そして手を差し出して、初めて出会った時のようにその言葉を口にした。

「黒竜よ。私と番となり、生涯を共に生きてくれ」

番——オスとメスが常に共にあること。つまり、夫婦になるということじゃ。

ここにきてようやく妾は理解した。この人間が口にする言葉は、何一つ嘘偽りがない本心なのだということを。

この人間は同種の生き物に対するそれと同じように、恋愛対象として竜である妾のこのを見ているのだということを。

「正気か貴様。短命な人間ごときが、どのようにして悠久の時を生きるこの妾と生涯を共にするのだろうか」

「問題ない！ なぜなら私は不死身だからな！ 事実、お前に何度殺されそうになっても立ち上がってきたであろう？」

「番になるということは、愛の営みをするということでもある。貴様のその小さな体でどのようにして十メートルにも及ぶ妾と愛を育むというのじゃ」

「無論、我が命を賭して！ お前が求めるいかなる愛の形もこの私、フェルド・レア・ヴァンキッシュが全身全霊をもって応えてみせよう！」

よく分かった。この人間は頭がおかしい。

長き時を生き数多の人間を見てきたが、その中でもこやつはダントツでイカれておる。だが——

「——面白い」

「つ!？」

妾の身体から大量の蒸気が吹き上がり、竜の身体が人間の娘の身体に変わる。

人化した妾のを見て、男はなぜか落胆したような顔をしていた。

人間となった妾の容姿は、人間の男であれば誰しもが見惚れるような絶世の美少女であるはずなのに。

まるでなぜ竜の姿ではないのだ? と言わんばかりに。やはり頭がおかしいのじゃこ

やつは。だがそんなところも面白い。

「人間。生涯を共に生きると言ったな。良からう。これより妾と貴様の命はやがて朽ち果てるその時まで共にある。これは心臓の誓いじゃ。いかなる理由があれど、もしこの誓いが遵守されぬその時は――」

歩み寄り男の目の前で立ち止まる。妾より頭一つ分背の高い男は動揺しているのかこちらを見下ろして硬直していた。

妾は背伸びをして男の唇に口づけをすると、微笑みながら言った。

「――頭から嘔み殺す。努々覚えておくがよい」

赤い天井に赤い床。赤い屋根に赤い壁。皇帝だったあの男が妾のために建てた朱の宮

殿、業火宮。

物々しく囲われることを嫌う妾を氣遣って、とても皇帝が訪れる宮殿とは思えないほどに無防備な造りになっていて、人間嫌いな妾のために衛兵の一人すら立ち入れない。

妾と数人の侍女だけが暮らすには広すぎるほどのその開けた宮殿には、毎日のようにあの男のやかましい声が響いていた。

だが、もう二度とあの男の底抜けに能天気な声を聞くことはない。

もう二度とあの男が……初めて出会った時から少しも変わることもなかった、一生分の憧れを詰め込んだような澄んだ瞳で、妾を見上げてくれることはない。

「……生涯を共に生きると誓ったのに……愚か者め」

ベッドの上で天井を見上げながら、一人死んだように動かなくなってからもう何週間が経っただろうか。

今日も妾の様子をうかがうため、侍女が部屋の外から声をかけてきた。

「へ、ヘカーテ様。お加減はいかがでしょうか……?」

その声には怯えがまじっている。当然だ。

あの男が魔物の討伐に失敗して死んだという知らせを聞かされた時、妾は自分でも信じられないほどに取り乱し周囲に当たり散らした。

破壊が吹き荒れた後の部屋は廃墟^{はいきょ}のようになり、そうなる一部始終を侍女達は目の当たりにしていたのだ。

普通の人間であれば、もう二度と妾の傍に近づくとは思わないだろう。

どんなに殴られても燃やされても、妾への愛を謳^{うた}っていたあの男でもない限りは。

「何か御用がありましたら、いつでもお申し付けてくださいませ。私達侍女は皆、ヘカーテ様のことが心配で——」

「……」

返事をせずにいると、諦めたのか侍女の足音は遠ざかっていった。

それから少しすると、部屋から離れた宮殿の庭先から侍女達の声が聞こえてきた。

「ヘカーテ様、今日もお返事がなかったわ」

「先帝のフェルド様が魔物との戦いで亡くなられてから、もう一月近く経つのに」

「仕方ないわよ。フェルド様はヘカーテ様のことをまるで本当の皇妃様のように愛していたし、ヘカーテ様もフェルド様だけには心を許していたもの」

「フェルド様も不運よね。ヘカーテ様が一緒に討伐^{とうはつ}に行けば亡くならなかったかもしれないのに」

「それは無理よ。フェルド様はヘカーテ様を一度も戦いに連れていかなかったもの」

「それだけ大切に思っていたのね」

「おいたわしいわ、ヘカーテ様」

耳を塞いでベッドに顔を埋める。

「……侍女共の言う通りじゃ」

無理矢理にでも妾があつた男に——フェルドについていけば。魔大陸^{またいりく}からやってくる魔物なぞに後れを取ることはなかった。

いや、そもそも本当に「心臓の誓い」を結んでさえいれば、どうにでもなったのだ。だがあやつは言った。私は不死身だと。だから、妾はそれを信じて——

「何が不死身じゃ！ 魔物なんぞにあつさりと殺されおつて！」

激した感情のままにベッドの横の壁を拳で叩く。破砕音と共に壁に大きな穴があいた。「妾がどれだけ殴っても死ななかったくせに！」

立ち上がり、ベッドを持ち上げて地面に叩きつける。木製のベッドは木片を周囲にまき散らしながら砕け散った。

暴れたのはこれで二度目だ。侍女達はますます妾を恐れて近づくなくなるだろう。だがもうどうでも良い。フェルドが……唯一妾が心を許した人間がいなくなったこの国で。

誰にどう思われようが、最早どうでも良かった。

「……もう知らん。帰る」

山奥の元のねぐらに帰るため、乱れた服もそのままに部屋のドアに足を向ける。その直後、外の廊下から侍女共の慌てた声が聞こえてきた。

「お待ちください！ 若様！」

「今へカーテ様はお身体の調子が——」

続いて、その声を振り切るように、荒々しい足音が妾の部屋に近づいてくる。

足音の主は妾の部屋の前に立つと、入口のドアを吹き飛ばすように遠慮なく開け放った。

「美しい女人よ！ 貴女が黒竜の姫に相違ないか！」

そこに立っていたのは、赤髪をやけに偉そうな態度の童だった。

皇族が着るような豪華な布の衣服を身に纏い、若様と呼ばれていたから、おそらくは現皇帝となったバーンの息子のいずれかであろう。

童は腕を組み仁王立ちをしながら破壊された部屋を見渡すと、動じた様子もなくなっていた。

「うむ。この明らかに人外の者の手によって破壊されたであろう部屋の様子を見るに、

貴女で間違いなさそうだ。それにしてもまた豪快にやったものだな！ ふははは——」

「どけ」

尾を生やして童の身体を薙ぎ払う。

「ぐふっ!？」

横腹を妾の尾で殴られた童が吹き飛び、壁に叩きつけられた。

「妾は国を出る。二度とここには帰らぬ」

床に崩れ落ちるようにならずくまった童から返事はない。加減はしたがおそらく骨くらは折れているであろう。

フェルド亡き今、後ろ盾のない妾が皇族に手を出したと知ればおそらくはただでは済むまい。

だがもうそれでもどうでも良い。もしこの国の人間共が妾を討伐に来るのであれば全員——

「これが祖父殿が健康のために毎日食らっていたという黒竜姫の愛情表現か！ なるほど、これは良い！ 将来腰痛になった際には私も世話になるとしよう！」

「!？」

童が何事もなかったかのように立ち上がった。

やせ我慢ではない。打ち身や擦り傷こそあれ、骨には何も異常がないようだった。

「貴様、一体——」

「……すまなかった」

童が深く頭を下げる。意味が分からない。こやつは一体、妾に対して何を謝罪して——

「祖父殿が亡くなられたのは、私のせいだ」

「……なんだと？」

童は顔を上げ、真剣な顔で妾の目を見た。

燃えるような赤い髪と赤い瞳。孫というだけあって、その顔には妾と出会ったばかりの若い頃のフェルドの面影があった。

「魔物の討伐に行く前日、私は祖父殿から鋼鉄の神メテオールの加護を継承した。皇族のみに伝わる秘伝の継承術によつてな」

「……あ」

その言葉に、今まで不思議に思っていたことがすべて腑に落ちた。

鋼鉄の神メテオールの加護。その効力は、身体を鋼鉄のように硬くし、物理的な攻撃から身を守る。そして——

「……道理で妾の吐息で焼かれてピンピンしているわけじゃ」

——火に対する強力な耐性を得る。

あのペテン師め。何が不死身じゃ。加護がなければただの脆弱な人間だったくせに。

どうせ自分に似た孫をかわいがるあまり、調子に乗って加護を譲ったのであろう。

それで無謀にも魔物の討伐に出かけて死ぬとは、本当に救いたい間抜けじゃ。

「もし祖父殿が加護を持ったままだったならば、魔物にやられることはなかっただろう。すまなかった。この程度で貴女の気が済むとは思えないが、恨みがあるのならはすべて

私に——」

「……揃いも揃って間抜けばかりじゃな、ヴァンキッシュの皇族は」

童の頭に手をかざし魔法で怪我を治癒する。目を丸くして驚いている童に、妾は言った。

「あの男の命知らずっぷりは筋金入りじゃ。ジジイになっても最前線で戦うようなアホでは、加護があるうがなかうがいずれは命を落としていたであろう。それがただ少し早かっただけの話じゃ」

そうじゃ。妾は何を勘違いしていたのか。分かっていたではないか。人はいずれ死ぬと。それなのにあやつと言動があまりにも破天荒で。死という概念すらも覆してしまいうなほどにバカだったから。

信じてしまった。信じたくなくなってしまった。事実から目を背けて、すがってしまった。フェルドこそ……黒い鱗うろこと大きな身体を持つため同族の竜りゅうからも恐れられ、孤独に長い時を生きてきた妾と、死ぬまで共に生きてくれる唯一の番つがいなのかもしれないと。

「バカはお互い様、か……八つ当たりをしてしまっすまなかったな、童わらべよ」

童の頭わらへに手を乗せる。国を出ていく前に、最後に会えたのがこやつで良かった。こやつと話さなければ妾はこれから一生、フェルドのことを思い出しては、ぶつけどころのない怒りと切なさに身を焦がしていたことであろう。

「ではな。フェルドのようなアホは見習わずに、まともな良き王になるのだぞ」

童の頭わらへから手を離し、横を通り過ぎる。

開いたままのドアから外に出ると、不意に背後から抱き着かれた。

振り返ると、童わらべが小さな身体で抱え込むように妾を抱きしめていた。

「なんじゃ。謝罪ならもう必要ないぞ。元より童の貴様わらへが謝るようなことでは——」

「——捕まえた」

振り返った妾に童わらへは勢いよく顔を上げると、満面の笑みで言った。

「捕まえたぞ、黒竜の姫よ！ 今より貴女は私のものだ！ だから国から出ていくことは許さん！ いいな！」



「……は？」

困惑しながら童を見ると、大好きな玩具を見つけた子供のような目で妾を見上げている。

その目が、その顔が。出会った時のフェルドと重なった。

「白状するとだな、私は以前よりずっと、他のどの飛竜よりも雄大で美しい貴女の背に乗って、空を翔けてみたかったのだ。だが祖父殿が、自分が生きている間は絶対に他の者は乗せてやらんと頑として譲らなかつた。だから今までずっと我慢してきたのだ」

童はうつむき、握りしめた拳を震わせながら言った。

「祖父殿が亡くなられたことは残念に思う。当然、傍にいた貴女が最も気を落としていることだろう。だからしばらくの間は自分の気持ちは抑えておこうと思っていた。だが――」

勢いよく顔を上げた童は、訴えかけるような必死な表情で叫ぶ。

「生来より堪え性がなかつた私は今朝、ついに我慢が限界に達し、いても立ってもいられなくなってここに押しかけてしまったのだ！ 貴女の背に乗るためにな！ だということにだ！」

一々歌劇のセリフのように身振り手振りで語る童に、つい口元がほころんでしまう。

大げさなヤツめ。いや、フェルドも妾に求婚してきた時は、似たようなものだったが。血は争えぬということか。

「顔を合わせるなり貴女は国を出ていくという！ それは物心ついた時より空を舞う貴女の姿に恋焦がれ、ずっとこの瞬間を待ち望んでいた私に対してあまりにも無慈悲な行いだとは思わんか!？」

「口説き文句まで似たようなことを言いおって……貴様、先程自分のせいでフェルドが死んだと言っておきながら、死んだ途端にこれ幸いと妾を自分のものだと言い、あまつさえ背に乗せろなどと。あつかましいにも程があるとは思わぬのか？」

「謝罪せずとも良いと言ったのは貴女だぞ！ それに――」

童はドン、と自らの胸を拳で叩く。

そして昂る感情を閉じ込めたかのような、熱を帯びた声で言った。

「祖父殿は死んだが、その力と意志は私の中で生きている。私が死んだ後は、また次の強者が引き継ぐであろう。そうやって人は、肉体が朽ち果てた後も力と意志を伝えていくことで悠久の時を生きるのだ――」

力と意志を伝えることで、悠久の時を生きる。

フェルドが言っていた妾と共に生きるというのは、それを見越したことだったのやも

しれぬな。

そうでなければ何千年も生きる竜と生涯寄り添う誓いを立てるなど、気が触れた者の戯言にも程がある。

まったく……腹立たしい男だ。

あの男は妾に、たとえ肉体が減びようと自分が残した力と意志が消え去るその時まで、妾と共に生きようと、そう言っておったのだ。

やはりあの時噛み殺しておくのだったな。

「祖父殿は魔大陸からやってくる魔物や、虎視眈々と我が国を狙っている周辺の強国の手から、この国と大切な者達を守るために命を賭していた。その意志を引き継ぐためには私の力だけでは到底足りぬ」

童が妾の足元にひざまずく。あの日、フェルドが妾に求婚した時のように。

「黒竜の姫、ヘカーテよ。我が翼となり、共に空を翔けてくれ。この国を守るために」

この童はきつとフェルドと違って妾と生涯を共にする番になるつもりはない。

妾を手に入れたいのも、軍事力の強化といった打算的な考えがあつてのことだろう。

人間の都合など妾にとってはどうでも良いし、この国がどうなるうが知ったことではない。

だが――

「――物足りぬな」

この童がフェルドの力と意志を受け継ぐ者と言うのなら。

共に生きると、心臓の誓いを立てた番である妾は見届けなければなるまい。

「フェルドの力と意志を受け継ぎ、この国を守る？　だから手を貸してくれ？　他人の力をあてにし、他人の意志に縛られて生きるだけの矮小で脆弱な人間を、妾が背に乗せると思ふたか？」

フェルドの生きた証がこの世界から消え去るその時まで。

「妾を従えたくば、己が意志を示してみよ。このヘカーテが背に乘せるに足るほどの、鋼鉄よりも固く、燃え盛る炎のごとく強き意志をな」

「……フツ。どうやら貴女を手に入れるためにはうわべだけの言葉ではなく、己が内をつまびらかにするほかないようだ。では告げるとしよう、未だ誰にも語ったことのない我が野望の灯を――」

童は獣のような野蛮な笑みを浮かべると、妾の両手を強引に引き寄せた。

そしてもう離さぬと言わんばかりに強く握りしめてくると、目を見開き、喉も張り裂けんばかりに秘していた思いの文を叫んだ。

「私はヴァンキッシュの皇帝になる！そして、先帝フェルドの意志を受け継ぎ、ただ国を守るだけではなく！圧倒的な力をもってすべての国を屈服させ、ヴァンキッシュを世界一の強国とし！千年先、二千年の未来にもロマンシア大陸の歴史にこの名を轟かせよう！」

童の瞳の中に、業火のごとき野心の炎が燃え盛っているのが見えた。

これが内に秘していた本性とは、なんという傲慢な人間か。

フェルドのような好戦的なれど本質的には平和を愛していた男とはまるで違う。

まだ童なれど、この男の野望はいずれ大陸に大火を巻き起こすであろう。

「我が名はアルフレ임！ヴァンキッシュ帝国第一皇子、アルフレ임・レア・ヴァンキッシュである！」

このような男と共に行けば、行きつく先は果てのない永遠の闇か、すべてが灰燼と化した煉獄か。

待ち受けているのは無限に続く血風と鉄の匂いにまみれた地獄のような戦場だろう。

正直、正気の沙汰とは思えない。だが――

「――面白い」

久方ぶりに心が震えた。あまりのバカらしさに。

ロマンシア大陸におけるヴァンキッシュ帝国の立ち位置はその実、とても微妙で危ういものだ。

常に魔大陸から海を越えてやってくる魔物の脅威に晒されているため、大陸最強の空戦能力を持つ飛竜の大半をどうしてもそちらに割かざるを得ない。

終わらない戦いの中で勇猛な戦士達は命を散らしていき、人口は徐々に減少の一途をたどっている。フェルドが他国との争いよりも、自国を守ることに力を入れていたのも、そういった事情があった故のことだった。

それなのにこの童はあることか、守るだけでなく、すべての国を力でねじ伏せるとほざきおった。あまりにも現実味がない、童の戯言じゃ。

だがこやつは、アルフレ임はそれを本気でなそうとしている。なせると思っておる。「千年の既知を超えて妾の心を震わせたのは、貴様で二人目じゃ。妾が背に乗せる男とは、そうでなくてはの」

身かがめて、アルフレ임の額に口づけをする。

「これは魂の誓いじゃ。これより貴様と妾は、その身朽ち果てるその時まで――いや」妾の手を握るアルフレ임の指に、自分の指を絡める。もう二度と、決して離れぬように。

「その意志と力が消え去るその時まで共にある。いかなる理由があれど、もしこの誓いが遵守されぬその時は——」

こうして妾は、業火の貴公子の翼となった。千年先、二千年先の未来まで続くであろう、我が番の意志と共に生きるために。

「——頭から嘔み殺す。今度こそ、忘れるでないぞ。我が愛しのかがり火よ」

ドーン……と、遠くから聞こえてくる騒々しい喧噪に目を覚ました。

窓から差し込んでくる日差しに、重たい瞼を開く。

業火宮に戻ってきた後、自室のベッドでまどろんでいるうちにいつの間にか寝てしまったらしい。

長い間人化したままでいたのが響いたか。後で一度竜の姿に戻って、体内に澱んだ魔力を発散しなければなるまい。

「それにしてもあの女……スカーレットとか言ったか」

以前はアルフレイムに対してまったく興味がなさそうな顔をしておったくせに、レックスのことがあつたとはいえヴァンキッシュまでわざわざやってくるとは。

あの女だけはいかん。一刻も早くこのヴァンキッシュから追い出さなくては。なぜな

ら——

「あれはアルフレイムが最も好みとする女じゃ……！」

フェルド譲りのおかしな性癖を持つアルフレイムにとって、一般的な人間族の男が女に求めているような容姿や家柄は何の意味も持たない。

あやつが女に求めているものは自分と並び立つほどの「強さ」じゃ。

それは物理的な、腕力や闘争における強さだけではない。

どんな苦境にあつても決して心が折れず、己が意志を貫き通すという強さを持つていることじゃ。

その点、あのスカーレットという女は……認めたくないが意志の強さはいわずもがなとして、信じられぬことに素手で筋肉バカのアルフレイムを圧倒するほどの人外級の戦闘能力まで兼ね備えておる。

出会った瞬間に求婚したと本人は吹聴しておったが、その様が容易に想像できるわ。

「ヴァンキッシュの女ならともかく、つい最近見知ったばかりの他国の女など妾は絶対に認めんからな……！」

噂によればあのスカーレットという女、素行の悪さから自国の王子に婚約破棄をされたというではないか。

アルフレイムは何か事情があったのだらうなどと抜かしておったが、妾にはよく分かる。

あれは自らの欲求を満たすためであれば、他者を踏みにじることをなんとも思わない女じゃ。

というか、魔物や人間をブン殴っている時の嬉々とした様子を見ていれば、あの女がまともではないことぐらい一目で気づくであろうに。アルフレイムのアホめ。

「何が業火の花嫁か……ふん。気に食わぬ」

妾は断じてあの女に嫉妬しているわけではない。アルフレイムは妾が唯一番と認めた者の孫であり、妾の孫も同然。

そんな孫が悪い女に騙されそうになっているのを黙って見過ごすわけにはいかないだけじゃ。

「だがあの女……」

レックスのことを大切な家族と言った時のあの目。

他者を踏みにじることだけに喜びを感じるような人間が、あのような目をできるものなのか？

本当は自らの信念を貫き、大切な者を守るためならば力を振るうことも厭わず。

しかしそれによって周囲に称賛されることを好まず、つい露悪的に振る舞ってしまう。そんな不器用で、心優しい人間なのではないのか？

「ええい！ 余計なことを考えるな！ あの女は稀代の悪女じゃ！ そうに決まっておる！ そうでなければ妾はあの女を——」

ドーン！ と、大きな破砕音がして、業火宮が揺れた。

それからさらに立て続けに、ドン！ ドン！ と轟音が響き、その度に宮内

が揺れる。

「なんじゃ、この音は……？」

最初に聞こえた時は、いつもの侍女共の修練だろうと思って聞き流しておったが、今のはそんな生半可なものではない。

まるで妾に匹敵する巨大な飛竜が宮内で所構わず暴れ回っているかのような——

「おーい、姫ちゃん。起きてるー？」

ドアを開けて大型の竜に乗ったノアが勝手に部屋に入ってくる。こやつ……侍女の分際で主の返事も聞かずに勝手に入ってきてきおって。

いや、今はそんなことよりも先に聞くべきことがある。

「この騒ぎは何事じゃ」

「あれー？ あの歓迎会って姫ちゃんが企画したんじゃないの？」

「は？ 一体何を言って——」

ドーン!! と、さらに大きな音が響いた直後。

「うぎゃあああ……!!」

遠くから侍女の絶叫が聞こえてきた。

状況を把握するため目を閉じ、宮殿内のすべての音を聞き逃さないように意識を集中する。

すると、大広間の方から侍女共の足音と雄たけびにまじって、一人だけ、舞踊でも舞うかのように石畳の上を軽やかに跳ね回る音があった。その音が一つ地を蹴ることにあり得ないほどに大きな打撃音が響き、侍女の絶叫が湧き上がっている。

宮殿に張った妾の結界を破って敵が侵入した……？ いや、それならばノアがこんなところで呑気にしているわけがない。

だとすれば一体——ん？ 歓迎会？

「ノア。歓迎会と言っておったが、この宮殿内に今誰か来ておるのか？」

「またまたー。誰って、そんなの決まってるじゃん。業火の花嫁、スカーレ——」

ノアがその女の名を最後まで言うよりも早く、妾は猛スピードで大広間に駆けだして

いた。

「あの女ア！ 妾の宮殿に何してくれとんじゃあ！」



「——うぎゃあああ!？」

また一人、私に殴り飛ばされた方が広間の壁に激突して人型の穴をあけました。

まだ数十人はいるのであるう私を取り囲んだ女性の方々が、悔しそうな顔で後ずさりします。

頬についた返り血をハンカチでぬぐいながら、私は言いました。

「これで三十九人目の方ですわね。皆様、感謝いたしますわ」

恭しく礼をすると、女性達は皆困惑の表情を浮かべます。

「な、なんでアンタが私達に感謝してるのよ!？」

正直なところ、最初の数人を壁にめり込ませた時点で、この方々は戦意を喪失されるかと思っておりました。ですが——

たのですが……私、何かおかしいことを言ったかしら？」

「っ！ この女ア！」

「完全にあたし達のことを舐めてやがる！」

「絶対に許さない……！」

一人、また一人と殴れば殴るほどに。挑発すれば挑発するほどに。

こうして闘志を燃やして私に向かつてきてくれる。こんなに嬉しいことはありません。

「ヴァンキッシュに来て本当に良かった！」

パルミア教の残党を倒すために紅天竜騎兵团の方々と共闘した時には心のどこかで、

もうヴァンキッシュの方々と敵対することはないのかもしれないと思っていました。

この国にやってきた目的も、あわよくばお肉を殴れたらいいなと思いつながらも、あくまでレックスの病気を治すためでしたし。

それがまさかこんなことになるなんて……これは言葉だけの感謝では到底足りませんわね。

「私の殴りたい気持ち尊重したいという皆様のまごころに感謝を込めて、これからは一人一人、懇切丁寧にブン殴らせていただきますわね」

ポキポキと指の関節を鳴らす私に、皆様が身構えます。

さて、お次はどの方を血祭りにあげて差し上げましょうか——と、思っておりましたら。

皆様の中から、一人の女性が歩み出てきました。

口元にカラスの口のようなマスクをつけた長い黒髪のその方は、ぼそりと小声でつぶやきます。

「——どきなさい。この女の相手は貴女達には手に余るわ」

周囲の女性達が驚きの表情を浮かべる中、さらにもう一人。

ナナカと同じぐらいの小柄な体躯ながらも、丸太のように太く巨大な棒を担いだ短髪の女性が出てきます。

彼女は棒を床にズン、と突き立てると、広間に響き渡るような大音声で叫びました。

「——つたく、情けないったらないねえ！ こんなひよろつちい女一人に良いようにしゃしゃられてさあ！ アンタらそれでも業火宮の侍女組かい!?」

二人の登場に今まで劣勢で悔しそうな顔をしていた侍女の皆様が、自信を取り戻したのか一気に沸き上がります。

「来てくれたのね！ 業火宮侍女組三竜頭！」

「あの人達が来たからにはもうアンタはおしまいだよ！」

湧き上がる歓声に満更でもない顔をしながら、三竜頭と呼ばれた侍女のお二人はやれ

やれと肩をすくめました。

「ちよつと喧嘩が強いだけの女一人に雁首揃えて負け犬っぷりさらしてさあ？ オマエら全員今日で侍女廃業しな！」

「雑魚を相手に好き勝手暴れて調子に乗っているようだけど、これからは私達が雑魚相手に調子に乗らせてもらうわよ。もちろん雑魚っていうのは貴女のことだけど」

まあ頼もしい。これだけ大きなお口を叩くのですから、このお二人はさぞご自分の力に自信があるのでしょう。

これは殴り甲斐がありそうですね。

「たくさんの方を殴らせてくれるだけではなく、このような愉快な催し物までご用意してくださるなんて。至れり尽くせりとはこのことですね」

パンと手を軽く叩いて微笑むと、侍女達が怒りの表情で睨みつけてきます。

そんな中、マスクの方がおもむろに人差し指を立ててぼつりとつぶやきました。

「……一分よ」

そのつぶやきに侍女達が「え……？」と困惑の声をあげます。

マスクの方は自らの長い髪を手で弄びながら言いました。

「その調子に乗った顔を見れば分かるわ。貴女、自分のことを特別な存在だと思ってい

るでしょう？ でもそれは勘違い。貴女は狭い井戸の中で広い海を知らずに無様に飛び跳ねていただけのカエルよ。それを貴女に自覚させてあげるのには、たった一分で十分でこと。お分かり？」

直後、わっ！ と、侍女達から歓声があがります。

この状況を打破してくれる救世主の登場に、熱気冷めやらぬといったところでしょう。うか。

しかし、そんな様子をマスクの方の隣で見ていた小柄な方は「ハッ！」と小馬鹿にするように鼻を鳴らしました。彼女は私から背を向けて侍女達の方を向くと、マスクの方を真似するかのように入差し指を立てます。

「……一撃だ」

その発言に侍女の皆様が顔を合わせてどよめきます。

小柄な方は後ろを向いたまま、顔だけを私の方に向けて顎をしゃくり上げました。

「無駄な言葉は必要ねえ。身の程知らずのこの勘違い女を、これからアタイが一撃でぶちのめす。よく見ときな女共。この一撃こそが、業火宮侍女組の力の証明だ」

「……っ！」

侍女達から先程よりもさらに大きな歓声が湧き上がります。

この指を立てる仕草、ヴァンキッシュで流行っているのでしょうか。
「では皆様にならって私も」

人差し指と中指の二本を立てて見せます。するとそれを見た侍女達が嘲りの笑みを浮かべました。

「何よそれ。ピースサイン？」

「あまりの勝ち目のなさに気でも触れちゃったのかしら？ あはは——」

「二秒です」

私の言葉でその場が一瞬にして静まり返ります。

小柄な方は私に振り向くと、怒りにぴくぴくと頬をひくつかせて言いました。

「おいオマエ。それはもしかして、アタイ達を——」

「一人一秒で倒すので、お二人合わせて二秒かかるという意味ですわね」

食い気味に言うと、小柄な方のこめかみにビキビキと血管が浮き上がります。

片やマスクの方はうつむいてだらんと腕を下ろすと、人が変わったような低い声でつぶやきました。

「……脇役風情が調子乗ってんじゃねえぞ。一分で分からせるって言った私へのあてつけのつもりか？ 適当に半殺しにして追い出すつもりでいたが、もうやめだ。テメエは

全殺し決定。今更謝っても、もう遅い」

怒りに打ち震えているせいか、マスクのくちばし部分がカタカタと揺れています。

人を煽るのはお得意でも、煽られるのには耐性がないようですわね。

「弱者ほどよく吠える、と言いますが。貴女達は本当におしゃべりが大好きですのね。ところでそろそろ数え始めてもよろしいですか？ まあすぐに終わってしまうと思いますが。何しろたった二秒なので」

「上等だコラァ！ やれるもんならやってみ——」

指を立てていない方の拳を振り抜き、圧縮した空気の塊を放って三メートルほどの距離に立っていた小柄な方の顎を打ち抜きます。

「ろおおおん……」

気の抜けた声を漏らしながら、小柄な方が白目を剥いてガクン、と膝から崩れ落ちました。

「一」

一秒経過。人差し指を倒します。

「えっ？」

一瞬遅れて、何が起こったのか分からないマスクの方が隣で膝をつく小柄な方に視線

を向けます。その隙に地面を蹴り、瞬きの間に彼女の懐に接近。

「へ？ あ、ちょ、まつ——」

数を数えるために立てたままの中指を、マスクの方の顎に差し込み、そのまま勢いよく上に跳ね上げます。

「てえええん……」

マスクが吹っ飛ばされて宙を舞います。

顎を私の指で跳ね上げられたマスクなしのマスクの方は、頭を激しく揺さぶられたせいか、泡を吹いてガクン、と膝から崩れ落ちました。

「二」

中指を倒して数え終えます。丁度二秒で片付きましたね。

さて、皆様の反応は——

「侍女組最強の三竜頭の二人がたった二秒で……」

「ば、化け物……」

何やらお通夜のようになってしまっておりました。一体どうしたことでしょう。

「おかしいですね。皆様、ヴァンキッシュ的には今は盛り上がりどころでは……？」

「敵の活躍で盛り上げられるかあ!!」

叱られてしまいました。皆様に馴染めるように、良かれと思って真似をしたのですが、異国の文化を理解するのは、中々に難しいものですわね。ですが私は諦めません。これから同盟相手として密接に関わっていくことになるかもしれないヴァンキッシュ帝国。

その地に暮らす人々の文化を知ることが、より深い相互理解のためには避けては通れないことでしょう。

そして今この場において、互いを分かり合うために最も適した方法はたった一つ——

「さあ続けましょうか。私達の明るい未来のために——拳の異文化交流を」

「そんな暴力的な異文化交流の仕方があるかー!!」
ほら見てごらんなさい。私の言葉に対して息を合わせたようなツツコミの嵐。

まるで長年連れ添った親友のような連帯感ですわ。

「この調子であと三、四人殴り倒せば私達、もつと分かり合えますわね。というわけで床と地面と壁、皆様はどちらに埋めれるのがお好きですか？」

手の平に拳を打ち付けながら尋ねると、侍女達は焦ったように顔に汗をにじませます。
「くう……ま、まだよ！ まだ三竜頭にはあの方がいるじゃない！」

「そうだったわ！ さっきの二人は三竜頭の中でも最弱！」

「三竜頭の面汚しだった二人と違って、あの方は身長二メートル超えの上、私の腰よりも腕回りが太くて、最早女どころか人間じゃないゴリラ並みの圧倒的な肉体を持った、バキバキの近接特化型侍女なんだから！」

まだそのような殴り甲斐のありそうな方がいらつしやったのですね。

あら……？ でもその特徴の方にどこかで見覚えがあるような。

「もしやその方とはあの方でしょうか」

侍女達の後ろの壁を指差します。

「はっ！ そうやって隙を作って私達を出し抜こうっていうんでしょ？ その手には乗らないわよ！」

「お生憎様！ つくならもつとマシな嘘をつくんだね！」

「そもそもあのバカデカい上に目立ちたがり屋のゴリラ女がそんな目立たない場所にいるわけが——」

「ねえ、ちょっとあれ見て……」

侍女の一人が青ざめた顔で自分達の背後の壁を指差します。

「何よ、アンタまで。一体背後に何があるっていうの、よ……」

洪々振り返った侍女が壁を見て硬直します。

その様子を不審に思った他の侍女達も壁に視線を向けて、あんぐりと口を開けて呆然としました。

そこには部屋に入るなり棒で殴りかかってきた方の一人。巨体の侍女が白目を剥いて壁にめり込んでおります。

ああ、なるほど。この方々は後から部屋に入ってきた方々でしたか。

それでは最初に壁にめり込んだあの巨漢の方の惨状を知らなくても仕方ありませんね。

「嘘でしょ……三竜頭が全員、こんな細腕の女一人相手にかすり傷一つ負わせられずにやられるなんて」

「これが、業火の花嫁……」

侍女達が壁から振り返って私を見ます。

彼女達の顔からは怒りが消え、その目からは溢れんばかりに浮かんでいた私への敵意が消えていました。

あら……てつきり仲間をやられた怒りでより激しくこちらに向かってくるかと思いましたが。

「あの、皆様……？」

困惑する私に、侍女達は一斉に床に手と膝をつく、深く頭を下げて土下座しました。そして、広間に響き渡るような大声で叫びます。

「紅蓮の花嫁スカレット様にご挨拶を申し上げますッ！」

侍女達は顔を上げると、目を輝かせて羨望の眼差しで私を見ていました。

これはいいません。何がいけないのかというと、こんな純粋な憧れの眼差しで見られては、私がこの方々を殴ったらいけないような雰囲気になってしまうではありませんか。なんとかして元の殺伐とした雰囲気に戻さなくては……！」

「さあ、皆様。気を取り直して殴り合いの続きを始めま——」

「あたし達の完敗です！ どうぞお気の済むまで殴ってください！」

「スカレット様のように強く美しい、まさに業火宮の理想を体現したかのような女に殴られるなら、アタイ達は本望です！」

「業火の花嫁、スカレット様！ 万歳！」

「万歳！ 万歳！ 万々歳！」

口々に私を称賛する言葉を叫ぶ侍女達。

女性しかいなかったのですっかり忘れておりましたが、そうでした。

バーン様のご意向はどうあれ、元よりこの国ヴァンキッシュは、すべての国民が武道

を嗜み、強さこそを至高とする脳筋国家でした。

この方々にとっては相手が敵であっても、その強さを認めれば敬意を払う対象となるのです。

久しぶりに思う存分暴力を振るえる機会を得たので、調子に乗って力を見せすぎましたね。

残念ですが、この辺りで異文化交流はひとまずお開きのようです。

「お立ちになってくださいませ。私はもう氣にしておりません。それよりも、まずは倒れている方の治療を——」

土下座し続けている侍女の方の手を取り、立ち上がらせようとしたその時。

上方から強烈な魔力の気配を感じて、私は二階に続く階段に視線を向けました。

そこには、怒りに顔をゆがめたヘカーテ様が立っております。

「貴様ら……」

彼女は階段から散々に破壊された広間の床や壁を見渡すと、後ろにのけぞり大きく息を吸い込みました。

それを見た侍女達が慌てて立ち上がり、広間から出ていこうと四方八方に逃げ出します。

何が起こるのか分からず、私が首を傾げる中。

ヘカーテ様は口を大きく開けると、広間を埋め尽くすほどの黒い炎の吐息を猛烈な勢いで吐き出しました。

「貴様ら全員妾の宮殿から出ていけええー!!!」

ヘカーテ様が広間を破壊し、怒り心頭でご自分の部屋に戻られた後。

私とナナカは侍女に二階のとある部屋の前に案内されました。

「ここです。いつでもご自由におくつろぎくださいませ！ 何か御用がありましたらあたし達がお付きの従者に言伝を！ それでは！」

侍女は笑顔でそう言うと、廊下を走って戻っていききました。

広間では今、これ以上ヘカーテ様のご機嫌を損ねないようにと侍女達が破壊された部屋の後片付けをしているので、その応援に向かうのでしょうか。

「私達も手伝わなくて良かったのかしら」

「自分達の仕事だからって言って聞かなかったし、良いんじゃないか別に。すぐ直るみたいだし」

私のつぶやきにナナカがなんでもなしのように答えます。

侍女の方いわく、ヘカーテ様の結界内で壊れた壁や床は、術者の魔力が供給される限り自動的に補修ほしゅうされるとのこと。

とはいえ、壊れた他のものや汚れは戻らないので、お掃除にはかなり時間がかかりそうです。

「先程は随分と大人しかったですわね、ナナカは。いつもならすぐに止めに入りますのに」「いや、ジンがヴァンキッシュでは売られた喧嘩は買わないと舐められるだけだから、スカーレットには殺さない程度であれば殴ってもらっても大丈夫だって言ってたから……」

「まあ、なんて野蛮やばんな」

なんとということでしょう。ならば私は最初からこの拳を抑える必要などなかったのですね。

皆様を殴らないで損しました。もったいないですわ。

「ですがそういうことであれば仕方ありませんね。あまり気は進みませんが、これから売られた喧嘩はすべて買わせていただくとしましよう。本当に、渋々ですが」

「言ってることと表情がまったく一致してないぞ……って、撫でて誤魔化そうとするな！」